

リバティおおさか 35年の歴史 いったん幕

写真は朝日新聞 5月26日夕刊1面。関心あるテーマなので抜粋して紹介する。部落問題を中心に人権問題を総合的に取り上げてきた大阪市浪速区の大阪人権博物館(リバティおおさか)が、最後の一般公開を終える今月末、35年の歴史にいったん幕を下ろす。

博物館をめぐる状況が大きく変わったのは、橋下徹氏が大阪府知事に就任した2008年だ。橋下氏は「展示内容が分かりにくい。公金を投入する意味を感じない」「差別、人権などネガティブな面が多い」と見直しを求めた。府と市は13年、年間計1億~2億円程度だった運営補助金を全廃した。

橋下氏は財政改革の一環として大阪市長時代の15年、博物館を運営する財団に対し、無償提供していた市有地からの立ち退きと賃料相当の損害金の支払いを求めて大阪地裁に提訴。財団は「行政権力の乱用」と反論したが、地裁は今年3月、市が賃料相当の約1億9千万円を免除する代わりに、財団が土地を明け渡すという和解案を提示し、双方が受け入れた。博物館が立つのは人権運動の象徴の地といえる。被差別部落出身の有志が土地や資金を出し合って1928年に整備した旧大阪市立栄小学校の敷地だ。博物館の建物は小学校を模してある。25~40年には全国水平社の本部も近くにあった。

橋下氏が率いた大阪維新の会は大阪人権博物館だけでなく、多くの文化施設に対する補助金などの削減を進めてきた。日本(当時大阪)センチュリー交響楽団への府の2008年度の補助金は4億円だったが、11年度に全廃。同年度に約5千万円だった文楽協会に対する補助金も「特定団体の運営費は出さない」として15年度に打ち切った。展示内容の見直しを迫ることもあった。大阪国際平和センター(ピースおおさか)＝大阪府中央区について、維新の府議らは11年、「偏向した展示物が多すぎる」と主張。橋下氏も「展示内容が不適切となれば、当然廃館も考えなければならない」との考えを示した。同センターは15年のリニューアルで、旧日本軍の加害に関する従来の展示をすべて撤去した。

記事を読んで、まずは残念である。リバティ大阪への執拗な「攻撃」に対して、大阪維新の会、大阪府・大阪市に対して怒りを表明しておきたい。リバティ大阪だけではない。多くの文化施設に対する補助金カット、展示内容への干渉など、大阪ならではの文化への不当な干渉をしてきたのが、橋下から松井、吉村へと続く「維新政治」だ。リバティ大阪35年の歴史にいったん幕は、「維新政治」の負の決算書の一つとして刻まれる。

(2020年5月29日)

